オーストラリアの資料からみたレルヒとスキー

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 新井, 博 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/5325

氏　　名	新井　　博
本　　籍	茨城県
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	社博乙第19号
学位授与の日付	平成18年3月22日
学位授与の要件	論文博士（学位規則第4条第2項）
学位授与の題目	オーストリアの資料からみたレルヒとスキー (On Lerch and Skiing: What the Evidence in Austria Indicates)
論文審査委員	委員長　大久保　英　哲 委　員　野村真理, 楠根重和 奥田晴樹, 安川哲夫

学位論文要旨

日本におけるスキー発祥期に関する研究は、導入者であるオーストリアの軍人レルヒによる来日中の僅か2年間のスキー紹介に集中し、祖国での彼の様子について全くと言ってよいほど触れていない。そのために、従来の研究は、オーストリアにおける当時の国状や同スキー事情を踏まえての、発祥期の特徴を掴むことがなされていない。

本研究では、発祥期における特徴を再考するために、祖国オーストリアでのパイオニア・レルヒの半生と、更に彼とスキーの関係について解明することを目的とする。

研究の方法は、レルヒの半生について触れるために、誕生からギムナジウム卒業までの誕生・修学時期、士官学校から軍人として来日するまでの軍隊時期の2つの時期について、個々の時期における特徴を明らかにする。

また、レルヒとスキーの関係について触れるために、祖国でのスキーに関する経験、日本での指導決定の経緯、指導内容に関して特徴を明らかにする。更に、レルヒの祖国でのスキー講習、スキーツアー、スキー競技会、軍隊スキーの経験と来日中における同種の指導内容を照らし合わせ、祖国での経験と日本での紹介における連続性を解明する。それによって、日本スキー発祥期における特徴を再考する。

本論では、レルヒの半生、また彼とスキーの関係について、以下の事実が明らかとなった。まず、レルヒの半生については以下のようである。

レルヒは1869年8月31日現在スロバキアのプレスブルグで誕生した。父が大佐、母も父を軍人に持つ軍人色の強い家系で育ち、更に、本人も極めて優秀な成績でギムナジウムを終了し、当時憧れの職業とされた軍人の道を選択した。1879年ヴィナー・ノイシュタットの士官学校に入学し優秀な成績で修了すると、1881年将校として部隊に配属された。3年後1894年参謀将校となるためウィーンの幹部学校に進学し、授業に対する態度等極めて熱心で成績も特別優秀であった。終了後、1896年参謀将校として部隊に配属されてから後も、任務に対する優れた態度や軍人としての高い才覚を発揮し、極めて高い評価を受けていた。1902年オーストリア・ハンガリー（K.U.K.）帝国の軍隊組織を統括するウィーン国防省参謀本部将校に抜擢された。参謀本部では作戦行動班に所属し、軍全体の作戦行動、特殊作戦活動、兵の組織等重要な任務を担当した。参謀本部での任務においても優れた能力を発揮し、高い信頼と評価を得ていた。

1905年以降三国同盟と三国協商を背景に重層的な国家間の対立が火花を散らし、バルカン半島の情勢は緊迫の度を深めていた。更に、バルカンへの南下を企図するロシアの動向が拍車をかけ、火薬庫と呼ばれる程緊張を高めていた。各国の情報収集活動は、戦争勃発を想定して活発化した。K.U.K.参謀総長コンラートはロシアの動向に影響を及ぼす日本軍の視察を企図し、同本部で極東における軍事を担当していた信頼の厚いレルヒにその任務を託した。コンラートの企図は早速国防省から日本と中国に伝えられた、中国からは、間もなく受け入れ許可が国防省にもたらされたが、日本からの場合は視察内容の確認を求められることがあったが了承された。レルヒは1910年9月末にトリエステの港から日本に向け出航した。

レルヒは、参謀本部の任務として1906年から日本軍をはじめとする極東における軍隊の研究を続けてきたため、1905年日露戦争でロシアに大勝した後、日本陸軍の歩兵操典がドイツ式から日本式の歩兵操典の内容に変わったことに強い関心を抱いていた。そして、レルヒは具体的に視察目的を、①違った兵科における部隊の視察、②歩兵と砲兵の射撃訓練の視察、③軍隊訓練の視察、④大演習の視察と決めていた。

1910年11月レルヒは来日し翌年1月5日から高田第13師団に配属すると、スキー指導の傍ら同1月から12月まで高田の部隊で上記の①②③④の内容について丹念な軍事視察を実施した。日本軍の様子はレルヒによってK.U.K.国防省に報告れている。K.U.K.国防省は、レルヒの視察に対して高い評価を行っていた。

次に、彼とスキーの関係について明らかになった事実は、次のようであった。

1910年11月末レルヒは日本に着き、陸軍省に地方の雪国にある部隊への配属を希望して、翌年1月からの配属を待っていた。東京のK.U.K.大使館付武官プッツは、同年12月10日陸軍省に対し、スキーが得意で功績のあったレルヒに日本でスキー指導の機会を持てるように丁重な提案を行った。陸軍省はプッツの提案を受け入れ、レルヒの高田への配属とスキーの有効性を確認する実験を決定し、12月17日陸軍省から高田にその旨を伝えたのである。高田師団ではスキーの準備をしてレルヒを迎えるつもりであったが、実現しなかった。レルヒは高田に着くと改めてスキー指導を依頼され、早速1月12日から指導を始めたのである。

彼は来日する10年前、まだ人々にスキーがなじみのない時期にインスブルックの部隊でビルゲリー大尉によるスキー実践を参謀将校として見聞し必要性を認識した。1902年ウィーン国防省に抜擢されたことを契機に、リリエンフェルトに住むアルペンスキー技術発案者ツダルスキーの下で1903年から本格的に練習を始めた。その後、日本に向かう寸前までアルペンスキー技術を普及する活動をアルペンスキー・クラブで積極的に実施した。レルヒはクラブの幹部にも選ばれ、クラブ全体の運営にも関わった。また、スキー活動ではスキーツアーの責任者として、会員のためにツアーを企画し、実際の指導に当った。更に、K.U.K.軍隊でスキーが実施されていない時に、正式に軍隊に導入するために活躍したのである。

来日中の1911年と1912年のシーズンにレルヒは、ツダルスキーの指導やアルペンスキー・クラブの活動を通して培った優れたスキー技術を、新潟県の高田と北海道の旭川で軍人や市民に指導した。指導の内容は、講習、ツアー、競技会、軍隊スキーに関する内容であった。

講習では、ツダルスキーによって考案された一本杖を使いプルークスタイルを基本としたアルペンスキー技術を高田と旭川で伝えた。ツアーについては、目的地の山頂を目指してスキーで登り、下山の時にスキーを楽しむ、祖国で実施してきたツアーのスタイルを高田と旭川で紹介している。競技会では、山頂或いは中腹から麓まで滑り降りるアルペンスキー・クラブで行われた滑降のスタイルを紹介している。軍隊スキーでは、行軍や雪上の運搬等についてツダルスキーの下で学んだ内容を紹介している。

これらの新しい事実を踏まえると、日本スキーの発祥期の特徴は次のように再考することが出来る。

第1、K.U.K.国防省参謀本部で極東の軍事を研究していたレルヒが、ロシアの動向に影響を及ぼす

日本軍の最新の状況を掴むために、国防省から派遣された。第2、日本におけるレルヒによスキー指導のきっかけは、彼のスキー経験を熟知していたK.U.K.大使館付武官プッツによる日本陸軍省へのスキー指導実施の提案によるものであり、オーストリア側からの提案であった。第3、当時高田第13師団長長岡外史はレルヒの高田でのスキー指導を好機と捉え、軍人から市民にまで普及するため、レルヒのスキー指導に積極的に協力した。第4、祖国でのレルヒは任務から刺激を受けスキーを始め、ツダルスキーの下でアルペンスキー技術を習得し、軍隊へのスキー導入と市民への普及に功績を残した。第5、レルヒは祖国におけるクラブでの活動とツダルスキーとの活動によって、講習、ツアー、競技会、軍隊スキーに充分精通し、日本でのスキー指導に際して同内容を、高田と旭川で軍人や市民に紹介した。

Abstract

The purpose of this study is to clarify that part of Lerch's earlier life and the activities related to skiing that enabled him later to become a pioneer of skiing in Japan. The significance of this study is to reconsider the period of birth in Japanese skiing in light of what we now know about Lerch in his own country, and thus to clarify the historical roots of Japanese skiing. The results of this study can be summarized as follows:

(1) The reason of Lerch's coming to Japan was his dispatch on orders cut at the department of national defense, assigning him the role of finding out the condition and overall situation of the Japanese army relative to the rival European global power, Russia, and its army in the Far East.

(2) The overall character and personality evidenced from his boyhood and school careers reveal a man of poise and excellence, and these characteristics carried over into his military career as a junior officer.

(3) The impetus for Lerch to start his instruction in skiing was the proposal made by a military attache at the embassy in Putz, a man who knew Lerch very well.

(4) Lerch was motivated by his sense of duty and service as a soldier to learn skiing under Zdarsky. He then rendered distinguished services for the purpose of introducing skiing to the army as well as its spread amongst the citizenry.

(5) After coming to Japan, Lerch proved able to teach and promote skiing: he taught formal ski lessons, conducted ski tours, and oversaw ski competitions. These experiences and expertise enabled him to introduce in Japan skiing as an alpine sport and a skill with military application. Much of this he had learned in Austria, when he had helped Zudarsky to promote the sport of alpine skiing while also developing the army's alpine infantry techniques.

論文審査結果の要旨

これまで日本におけるスキー導入史研究は、導入者であるオーストリアの軍人レルヒ来日中の2年間のスキー紹介に集中していたと言ってよい。それに対して本研究は、オーストリアでの新たな史料発掘や収集をもとにしたレルヒの誕生・就学・軍人としての半生とオーストリアにおけるスキー活動の関係、さらにオーストリアの日本駐在武官プッツの資料を検討することによって、来日後のレルヒが高田師団に配属されてスキー指導に当たるようになった経緯など、レルヒを中心とした日本におけるスキー史にあらたな史実と解釈を加え、スキー史叙述を修正するものとして高く評価される。

本論文は2部構成であり、第1部ではレルヒの生い立ちから来日に至る半生をオーストリア軍事博物館等所蔵の軍歴簿など多数の一次史料を駆使しながら明らかにしている。それらによれば、レルヒは1869年8月31日現在スロバキアのプレスブルグで誕生した。父も大佐、母も父が軍人といういわば軍人の家系に育ち、レルヒ自身もギムナジウムを優秀な成績で卒業したあとは、当時花形の職業とされた軍人の道を選択した。ヴィナー・ノイシュタットの士官学校を優秀な成績で修了した後、1881年将校として部隊に配属され、1894年には参謀将校となるためウィーンの幹部学校に入学、終了後、1896年には参謀将校として部隊に配属され、1902年にはウィーンの国防省参謀本部将校となった。

1905年以降三国同盟と三国協商を背景にバルカン半島の情勢は緊迫の度を深めるにつれ、参謀総長コンラートはロシアの動向に影響を及ぼす日本軍に関心を寄せ、同本部で極東における軍事問題を担当していたレルヒに視察を命じた。レルヒは1910年9月末にトリエステの港から日本に向け出航した。目的は①各種兵科の部隊視察、②歩兵・砲兵の射撃訓練視察、③軍隊訓練視察、④大演習視察であった。

第2部ではレルヒとスキーとの関わりについて、オーストリアにおけるスキー経験と来日後のスキー指導活動を比較対照する形で明らかにしている。彼は来日する10年前、当時オーストリアでもまだなじみが薄かった時期に、インスブルックの部隊でビルゲリー大尉によるスキー実践を見て、軍隊戦略におけるその有用性を認識した。1902年ウィーン国防省に抜擢されたことを契機に、リリエンフェルトに住むアルペンスキー技術発案者ツダルスキーの下で1903年から本格的に練習を始め、日本に向かう寸前までアルペンスキー技術を普及する活動をアルペンスキー・クラブで積極的に実施した。レルヒはクラブの幹部にも選ばれ、クラブ全体の運営にも関わった。また、スキーツアーの責任者として、ツアーを企画し、また実際の指導にも当たった。このような活動を踏まえて、オーストリアハンガリー帝国（以下K.U.K.）軍隊に正式にスキーを導入するために活躍した。

来日してからの1911年と1912年のシーズンにレルヒは、ツダルスキーの指導やアルペンスキー・クラブ、またK.U.K軍隊での活動を通して培った優れたスキー技術を、新潟県の高田と北海道の旭川で軍人や市民に指導した。指導の内容は、講習、ツアー、競技会、軍隊スキーの内容であった。

講習では、ツダルスキーによって考案された一本杖を使いボーゲンスタイルを基本としたアルペンスキー技術を高田と旭川で伝えた。ツアーについては、目的地の山頂を目指してスキーで登り、下山の時にスキーを楽しむ、祖国で実施してきたツアーのスタイルを高田と旭川で紹介した。競技会では、山頂或いは中腹から麓まで滑り降りるアルペンスキー・クラブで行われた滑降のスタイルを紹介した。軍隊スキーでは、行軍や雪上の運搬等についてツダルスキーの下で学んだ内容を紹介した。

なお、これまで未解明であったレルヒの高田への配属の経緯は次のようであった。1910年11月末レルヒは日本に着き、陸軍省に雪国地方の部隊配属を希望していた。東京のK.U.K. 大使館付武官プッツは、同年12月10日陸軍省に対し、スキーが得意でしかも功績もあるレルヒに日本でスキー指導の機会を与えてはどうかという意見書を提出した。陸軍省はプッツの提案を受け入れ、レルヒを高田へ配属し、スキーの有効性を確認する実験を行うことを決定し、12月17日陸軍省から高田にその旨が伝えられた。高田師団では事前にスキーの準備をしてレルヒを迎えるつもりであったが、これは成功

しなかった。レルヒは高田に着くとあらためてスキー指導を依頼され、早速1月から指導を始めた。

これらの新しい事実をもとにすると、日本スキーの発祥期の特徴は次のように書きあらためられねばならない。

第1、K.U.K. 国防省参謀本部で極東の軍事を研究していたレルヒが、ロシアの動向に影響を及ぼす日本軍の最新の状況を掴むために、国防省から派遣された。第2、日本におけるレルヒによるスキー指導のきっかけは、彼のスキー経験を熟知していたK.U.K. 大使館付武官プッツによる日本陸軍省へのスキー指導実施の提案によるものであり、オーストリア側からの提案であった。第3、当時高田第13師団長長岡外史はレルヒの高田でのスキー指導を好機と捉え、軍人から市民にまで普及するため、レルヒのスキー指導に積極的に協力した。第4、祖国でのレルヒは任務から刺激を受けスキーを始め、ツダルスキーの下でアルペンスキー技術を習得し、軍隊へのスキー導入と市民への普及に功績を残した。第5、レルヒは祖国におけるクラブでの活動とツダルスキーとの活動によって、講習、ツアー、競技会、軍隊スキーに精通し、高田と旭川でのスキー指導に際してもほぼ同じ内容を、軍人や市民に紹介した。

レルヒ来日からほぼ1世紀、本論文ではこのように、従来のスキー史を大きく書きあらためる成果を見せている。丹念な史料調査と収集活動の成果である。審査員一同一致して本論文を合格と判定した。